

「(仮称)さいたまトリエンナーレ基本構想(案)」について(説明資料)

<第2回審議会以降にいただいた主な意見>

<p>第2回文化芸術都市創造審議会 (25.10.23)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○美術中心ではなく、ジャンルを限定しない方が特色を出せるのではないか。 ○さいたま市らしいテーマを設定した上で、ジャンルはできるだけ幅広くした方が良い。 ○芸術監督は、基本構想に掲げる開催目的、開催方針を理解してくれる人物が良い。 ○現場で市民と協力しながら展開できるようなディレクターも必要 	<p>パブリック・コメント (26.1.6~2.5) ※「文化芸術都市創造計画素案」に対する意見を募集</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地元在住の優れた芸術家を積極的に支援し、参加を促すことが望ましい。 ○芸術家とそれ以外の専門家との協働を促すことのできる場づくりが望まれる。 ○川口市や川越市などの近隣自治体と連携してはどうか。 ○ワークショップや双方向型アートを通じ、市民が協同制作者として参加できるイベントにしてはどうか。
<p>タウンミーティング (25.10.20~12.14)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○子どもたちの豊かな感性を育む機会にしてほしい。 ○イメージづくりだけで、トリエンナーレに多額の予算を使うのは疑問。 ○市民が積極的に参加できるものとし、アーティストと一緒に作り上げていく形にできないか。 ○古典だけ、現代アートだけという考え方ではなく、融合に取り組むと次につながるのではないか。 ○音楽や映像、パフォーマンスと融合させて、五感でアートを体感できる内容にしてほしい。 ○地元のアーティストや団体を活用してはどうか。 ○大宮区役所が壊される前に建物全部を使って、アーティスト・イン・レジデンスなどに利用できないか。 ○若者だけで企画をつくる機会があると、トリエンナーレの幅が広がる。 	<p>第2回文化芸術に関する意見交換会 (26.1.21)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○インターナショナルな色彩にローカルな色彩をどう融合させていくかが大きな課題。 ○一般の人の心を動かして、見たい、聞きたいと思うようなものも出していくべきではないか。 ○コンピューターなどを活用したメディアアートを取り入れると、文化芸術活動に無関心な層を惹き付けることができるし、IT企業との連携による経済効果も期待できるのではないか。 ○サブカルチャーをもっと活用しても良いのではないか。メディアアートなどが、トリエンナーレとサブカルチャーをつなぐ触媒になる可能性があるのではないか。 ○初回は、市民が結集できる体制の整備に注力しても良いのではないか。 ○「トリエンナーレ」では無関心層には全く響かない。まずは市民に広めていくことが必要ではないか。 ○タレントなどトリエンナーレの顔になる人が活動すると、イメージを掴みやすくなるのではないか。

【第2回審議会(25.10.23)】

基本構想骨子(案)

- 1 基本的な考え方
 - (1) 開催目的
 - (2) 開催方針
 - ア 基本方針
 - イ 展開方針
 - (3) 期待される効果
- 2 開催構想
 - (1) 名称
 - (2) 開催年及び開催時期・会期
 - (3) 会場
 - (4) 事業規模
- 3 開催体制
- 4 スケジュール

<主に追加した視点>

- ①最先端の作品紹介だけではなく、市内各地の文化や市民による文化芸術活動が会う場をつくり、それらが融合又は触発しあうきっかけを創出することが特徴【2(2)ア 基本方針】
- ②現代美術だけではなく、既存のジャンルにとらわれない、領域横断的な作品展開を志向【2(2)イ 展開方針】
- ③既存のアートフェスティバルや観光イベントなどとの連携を模索【2(2)イ 展開方針】
- ④準備体制のイメージの具体化とディレクター選任の方法や条件を明確化【4 開催体制】
- ⑤市民とのパートナーシップの構築を模索【4 開催体制】

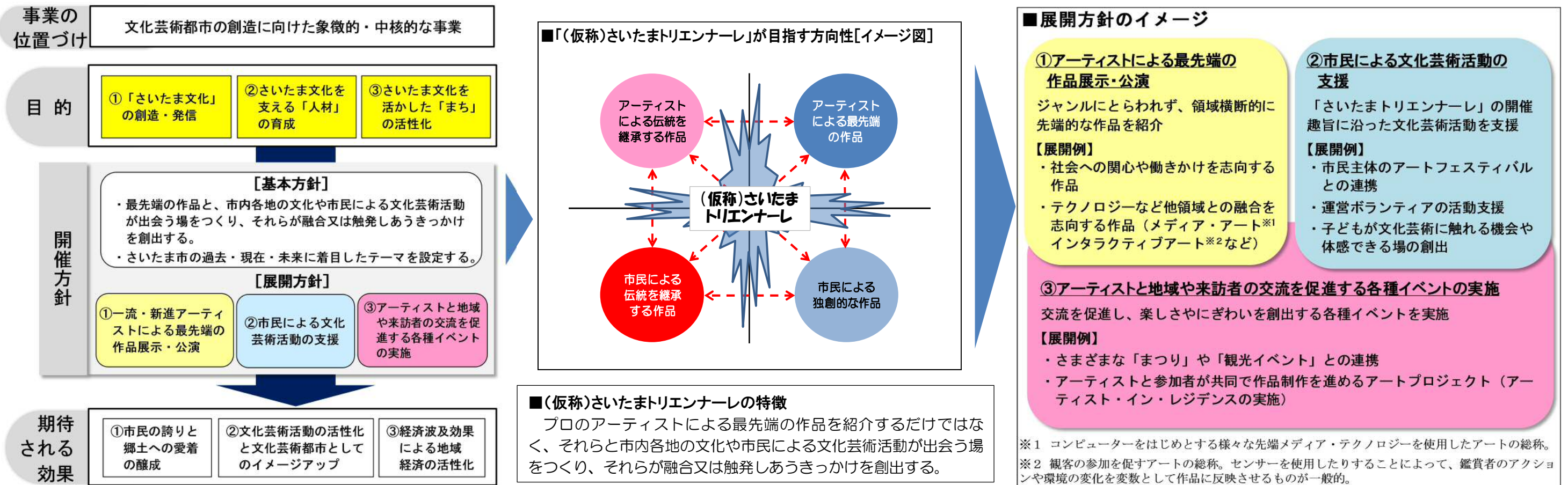
【第3回審議会(26.2.20)】

基本構想(案)

- 1 はじめに
- 2 基本的な考え方
 - (1) 開催目的
 - (2) 開催方針
 - ア 基本方針
 - イ 展開方針
 - (3) 期待される効果
- 2 開催構想
 - (1) 名称
 - (2) 開催年及び開催時期・会期
 - (3) 会場
 - (4) 事業規模
- 3 開催体制
- 4 スケジュール

(仮称)さいたまトリエンナーレ基本構想(案)の概要

1 基本的な考え方



2 開催構想

(1) 名称

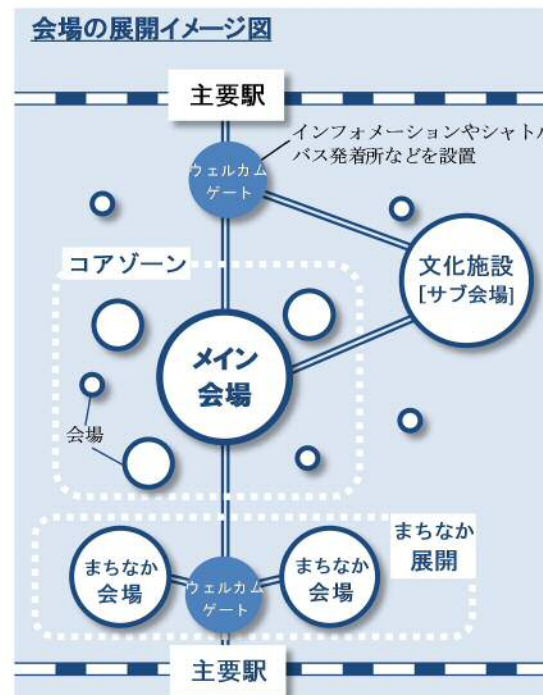
- ・当面は「(仮称)さいたまトリエンナーレ」(正式名称は、準備委員会設置後に決定)

(2) 開催年、開催時期・会期

- ・初回：平成28年度(さいたま市誕生15周年)
※以降、3年ごとの定期的な開催を目指す
- ・会期と開催時期は、今後検討を深め、準備委員会設置後に決定

(3) 会場

- ・来場者の利便性確保に配慮した上で、メインテーマと企画内容を勘案し、本市の地域特性を引き出しながら、回遊性を高める会場配置を計画
- ・メイン会場を中心に、徒歩又は自転車で回れる範囲の「コアゾーン」を設定
- ・その上で、美術館などの「文化施設」や「まちなか」の空き店舗などを活用
- ・大宮駅、さいたま新都心駅、浦和駅などの市内主要駅周辺を「ウェルカムゲート」として位置付け
- ・メイン会場等はメインテーマと企画内容を検討する過程で、早期に決定



(4) 事業規模

- ・準備委員会で本市にふさわしい事業規模や内容を検討
- ・入場料収入のほか、公的な助成金等の活用や企業等の協賛・協力の募集など、さまざまな資金調達の方法を検討

■国内の主な先行事例の事業規模(参考)

	会期	参加作家数	総事業費	来場者数	経済効果
水と土の芸術祭2012	164日	59組	約3億円	約72万人	約20億円
ヨコハマトリエンナーレ2011	83日	77組	約9億円	約33万人	約44億円
瀬戸内国際芸術祭2013	108日 (3期計)	200組	約10億円	約107万人	約132億円
あいちトリエンナーレ2010	72日	131組	約12億円	約57万人	約78億円

